

夢ではない、今あるものを最大限に使って 野田村の将来像を考える



■活動地域

岩手県九戸郡野田村

■活動期間

2011年7月28日～継続中

■活動体制

工学院大学 野澤研究室／八戸工業高等専門学校 河村研究室／首都大学東京 玉川研究室／首都大学東京 市古研究室

■活動キーワード

東日本大震災／復興／地方創生

■2018年度メンバー

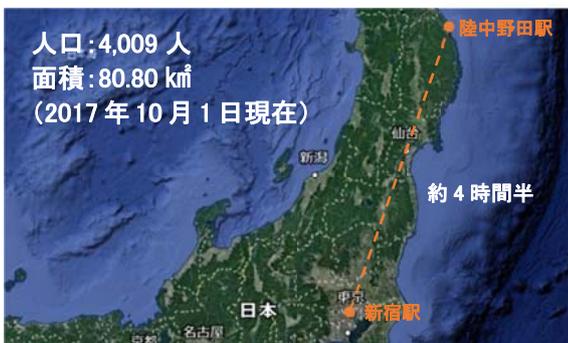
B4 宮崎 裕子／B3 諸泉 杏実

-活動経緯-

2011年3月11日に起こった東日本大震災において、岩手県野田村では、津波によって村内の住家1/3が被害を受けるなど、中心市街地や漁港など広域にわたって甚大な損害を被った。

2011年度より八戸高専の河村研究室、首都大学東京の玉川研究室と市古研究室、工学院大学の野澤研究室、計4つの研究室が主体となって、復興まちづくりを提案するCWSを行ってきた。

この4つの研究室では都市や建築について勉強しており、その知識を活かしてまちづくりの提案を行っている。



-対象地の概要-

岩手県北部にある、太平洋に面した小さな村である。長くゆるやかな砂浜が続く「十府ヶ浦海岸」や清流「安家川」や「和佐羅比山」など豊かな自然に恵まれている。特産品は、野田湾で採れる「ホタテ」や「ワカメ」、「ハウレンソウ」、「山ブドウ」や海水を数日間煮詰めて作る「のだ塩」などが有名である。

-昨年度までの活動-

2011年度からCWS形式で復興まちづくりの提案を行ってきた。2013年度から、より村に寄り添った提案を行うために、夏に生業・民泊体験を行い、それをもとに半年間かけて提案をまとめる形に変化した。2018年度は半年間かけて提案をまとめる形は引き継ぎながら、野田村から依頼された内容にも取り組むように変化した。少しずつCWSの形式とは離れているが、村民と学生の距離を縮め、野田村に根付くような提案を目指している。

2018 年度の活動内容

8 月に夏合宿として、民泊体験や村内見学や各班に分かれた生業体験（農業体験・トレイル体験など）、村民の方とのワークショップや交流会などを行った。

これらの体験をもとに半年間かけて提案をまとめ、2 月にもう一度野田村を訪れ、村民や村役場の方に向けた提案報告会を開催した。

報告会では夏の小学校の視察を通して、写真を使った思い出ワークショップを行った。村民の思い出や記憶を呼び覚ますことを目的に、年代にも工夫を加えた写真を、計 12 枚を使用し村内の出来事を村民と学生、村民同士で共有した。今後の課題も発見し、来年度の活動に引き継いでいく。

【振り返り班：諸泉】

CWS も 8 年目を迎え、2011 年からの活動のまとめをする動きが出て来た。そのまとめ作業のため、新規の学生が今まで提案してきた場所の見学を行なった。

下安家地区応急仮設住宅、米田・南浜高台団地、管理棟（はまなすハウス）や、野田村大学キャンパス、だらすこ工房や魚の番屋を見学した。また、防潮堤や整備された津波防災の都市公園（十府ヶ浦公園）は活用されている様子が見られないため、今後の活用も考えるために高さや幅の測定や利用状況の観察を行なった。

【トレイル班：宮崎】

夏合宿では、約 5 時間かけて野田村の南に位置する黒崎から北山崎の約 12 キロのトレイル体験をした。今回のスタート地点の黒崎では海岸線の遊歩道を歩き、その後山の中のトレイルを行なった。険しいルートが多く、草の生い茂る道や実際に土砂が崩れている道、半壊状態の橋が点在し大変苦労した。



思い出ワークショップの様子



小学校の視察



農業体験



村民の方と交流



トレイル体験



村民との交流会の様子